

1.2 失語症者の理解力に関わる一般的な要因

失語症者の聴覚的理解力は、話す能力よりも保たれていることが多い。この点は健常者でも同様で、同じ内容を書いたり話したりするよりも、聞いて理解するほうが通常は良好である。しかし、精査をすればほとんどの失語症者は、聴覚提示された言語素材の理解にあきらかな障害を持っている。この聴覚的な理解障害は複雑で、例えば素材の長さ、文法的な複雑さ、話される速度などの要因が影響を与えている。現在までこれら理解障害の研究は多数存在するが、ほとんどは一般名詞や短文を用いて検討されてきたものである。本節は、現在一般的に認められている要因を項目別に列挙するものである（Chapey、1981 参照）。

1. 文法的複雑さ

長さの要因よりも、文法的な複雑さが文の理解により影響を与える。Goodglass ら(1979)の実験でも、長くて単純な構造の文は、短くて文法的に複雑な文より良好に理解されている。その他、肯定文は否定文より理解される、能動文は受動態の文より理解される、可逆文や埋め込み文はより理解が困難であるなどは失語症者に共通した要因である。ブローカ失語の理解は、他の失語症タイプに比較して、文法的な要因の影響を受けやすいとする報告が多い。

2. 経験的知識

経験的な知識が生かせる文は、そうでない文よりも理解される。例えば、「警官が泥棒を逮捕した」という現実的な場面を表す文のほうが、「泥棒が警官を追いかけた」という文より理解される。冗長性が増せば、より理解できる可能性もある。例えば、「泥棒を探していた警官が、お金を盗

んでいた泥棒を逮捕した」などの文である。

一方、経験的な知識の介入を徹底して排したテストとして Token テストがある。これは、色、大きさ、形の異なるチップを、「大きな三角を小さな緑の四角の横に置いてください」などの指示に従って、操作するものである。このように冗長性がなく、経験が活かさない文の理解に失語症者は最も困難を見せる。

3. 素材の連続と長さ

無関係な単語（例えば、名詞）を連続して提示し、それらを記銘するよう求めると、中度の失語症者は2または3個程度の単語しか記銘できない。これは、単語把持力（スパン）の低下と呼ばれる。一方、文の長さは、文法的な複雑さが同じならば、長い文より短い文がより理解される。長さが同じ文ならば、含まれる重要語の数が少ない文ほど理解される。

4. 時間的な要因

多くの研究で、ゆっくり話されたほうが、理解を向上させることが明らかにされている。これは、意味の分析や統合に、より時間を要すからである。同様に、文節間などに、間を挿入すると理解が向上する。間を空けることで、それまでの内容が整理できるからである。ただし、間を空けすぎると、直前の項目を忘れてしまうことがある。理解の保続という現象もある。これは、ある素材を聞き続けているうち、一定の処理能力を超えると、新しい素材の受け付けができなくなる現象である。発症後の間もない時期によく見られる。

5. 聴覚的認知の障害

周囲に雑音があると、素材への集中が困難になり、理解が低下する。また、聴覚的な注意力の立ち上がりに時間を要し、話された文の始めを聞き落とすことがある。さらに、語音弁別の障害もある。これは、入力さ

れた言語素材が、正しく聴覚的に認知できないことである。例えば、「時計」に対して、「エ？なんと言いました？ トダナ？ですか？ トイレ？ですか？」などと聞き返すことである。「たまご」と「たばこ」のような似通った音形同士の弁別も難しい。これらは、ウェルニッケ失語によく伴う症状である。

6. 語彙の意味理解の障害

理解できる語彙の減少、または語彙の意味を支える階層構造が不安定になっているために起こる。やや重度の失語症では、聞いた単語を復唱できてもその意味が理解できないときがある。例えば、「時計」と復唱できても、「時計を指してください」というと、「時計って何でしたっけ？」のような反応をする。

理解の評価や訓練の方法として、複数の物品やカードを並べ、その中のものの名前を言って、指差しを求めることがよくある。この場合、選択肢の数が多いと指差しの正答率が不良となる、また、選択肢同士が意味的に関連していると、同じく正答率が低下する。これも語彙の意味を支える階層構造の不安定性に由来する。

7. 特定カテゴリーの障害と保存

どのような語彙カテゴリーの語の理解が難しいかに関しては、一般的には、色名、身体部位名、指の名前、左右や方向を表す語などが難しいとされる。その理由として、それぞれのカテゴリー内の単語が、互いに意味的に近いからである。通常、使用頻度が高い語彙は、少ない語彙よりも理解しやすい。また、抽象語は具象語よりも理解が難しい。

しかし、失語症者の中には、特定のカテゴリーに属する単語の理解のみが障害される、または保たれる症例がいる(Yamadori & Albert, 1973; Gentilini et al., 1988)。例えば、Warrington と McCarthy (1983)の全

失語症者は、食物と動物名が選択的に保たれていたが、物品名の理解などができなかった。時に、抽象的な単語のほうが、具体的な単語よりも理解される場合もある。文法的カテゴリーが異なる語彙同士、例えば名詞と動詞のようにどちらかが障害されることも観察されている。

これらの臨床結果は語彙全般の意味システムが語義や文法的カテゴリーにより体系づけられていることを示唆している(Miozzo et al., 1994; Forde & Humphreys, 1999, 参照)。固有名詞も一般名詞とは異なる特殊なカテゴリーであることがわかってきた。